第6回授業実践大会での看取りのデモンストレーション

2019年11月16日

【50歳代の男性（飯嶋先生）】　肺がん、骨転移　呼吸不全で死亡

医師：髙宮　家族：妻（伊藤さん）、息子（飯嶋俊也）

＜個室での死亡確認＞

妻がずっと付き添い、呼吸が止まったことを看護師に伝えた

医師はベッドサイドに来たが、死亡確認は息子の到着を待つこととなった

息子、到着

医師が訪室

患者さん、家族に礼をして入室

患者に言葉がけ

「本当によく頑張られましたね。いつも自慢していた息子さんも来られましたよ。」

息子さんへ

「1時間ほど前にお母様が呼吸をしていないことに気づかれました。息子さんは間にあわなかったと思われているかもしれませんが、そうではありません。死は点ではありません。呼吸や心臓が止まった瞬間でもありません。愛する人たちが集まり、一緒に見送る時が本当の死だと思います。今から、死亡確認をしますが、奥様、息子さんと一緒の看取りです。」

患者へ「失礼します。」

聴診器で、呼吸と心音を聴診。

「心臓や呼吸が止まっているのを確認しました。」

時計を見て、「令和元年、11月16日〇時〇分、ご臨終です」

妻「お父さん、ありがとう」と言って、すがりつく。10秒くらい。

落ち着くのを待って。

患者さんの思い出を語る。

「仕事に誇りを持ってきたこと、走ることも大好きだったこと。

そして、何よりご家族を愛していたこと。」

「冬山で遭難して、まるで眠っているかのように凍っている姿を家族に見せるというのが、人生計画だったと言っていました。」

家族にもどんな夫、父だったかを尋ねる。

医師「私は宗教を持っていませんが、亡くなった患者さんはどこかで見守っていてくれていると信じています。飯嶋さんもきっと奥様、息子さんをずっと見守ってくれていると思います。」

・・・・・・